

シリアの移動図書館

わけ なおみ
和気 尚美

(文学部助教 (図書館・情報学専攻))

2024年12月、シリアのアサド政権が崩壊したというニュースが世界を駆け巡った。驚きと衝撃でしばらく気もそぞろになり、私は夢中で報道記事を読みあさった。

かつて、私は2年間シリアで生活していたことがある。2007年から2009年まで国際協力機構(JICA)の青年海外協力隊(現JICA海外協力隊)としてシリアの首都ダマスカスに滞在した。シリアには、会いたい人、歩きたい道、懐かしい景色、魅力的な食べ物が山ほどある。そして、図書館情報学という分野への好奇心の扉が、「イフタヒ・ヤ・シムシム(開けゴマ)」と開いたのもシリアでのことだった。

きっかけは1台の移動図書館だった。当時、私はシリア環境省の内局で図書館とは全く関係のない活動をしていた。移動図書館と出会ったのは、休日に私的に訪れた、ゴラン高原に程近いシリア南西部の町でのことだった。移動図書館は、日本政府からの文化無償協力により購入されたもので、車体には日本とシリアの国旗が描かれていた。開架している資料は主に児童書で、多くはエジプトやレバノンなど、周辺国で出版されたものだった。移動図書館は、対象地域にある公立学校を定期的に巡回し、学校の生徒や地域の人びとに資料を貸し出していた。なかには、図書館を生まれて初めて利用する人もいる。「この本はいくら?」「この本は貰えるの?」などと利用者から質問されるたびに、スタッフは図書館とは何か、どのような仕組みか、丁寧に説明していた。移動図書館の車内は狭く、一度に入ることができる人数には限りがある。移動図書館の外には、あっという間に入館の順番を待つ人の長い列ができた。皆一同にわくわく、そわそわしており、その様子を見て不思議

と私も嬉しくなった。順番を待つ人のなかに、幼な子の手を引くヒジャブ(スカーフ)を被った成人女性の姿があった。女性は絵本を借りに毎回、移動図書館を利用しているのだと語った。そして、図書館で借りる絵本を通して、子どものみでなく、彼女自身も言葉の読み方を学んでいるのだと言った。彼女は小学校を中退しており、日常アラビア語で話し、聴くことはできるが、読み書きは困難なのだと打ち明けた。女性の話は私の心に深く突き刺さった。移動図書館が僻地へ本を届けることが、非識字の成人が改めて読み書きを学ぶ機会を創出しているという事実を目の当たりにし、目頭が熱くなった。

興奮冷めぬまま、ダマスカスの自室に戻り調べたところ、図書館サービスが十分に届いていない人びとに対して、サービス範囲を広げていく移動図書館のような活動を「アウトリーチ」や「エクステンションサービス」ということを知った。そして、図書館情報学という分野で探求していくことができるとわかった。その後、シリアからの帰国直後に大学院へ進学し、図書館情報学という分野と向き合う、苦しくも挑戦に満ちた日々が始動した。

シリアにおいて2011年からの約14年間は、市井の人びとの知的自由が脅かされた時間だった。その間のシリアでの図書館活動の様子は、デルフィユ・ミヌーイ著『戦場の希望の図書館』(東京創元社)などに詳述されている。そして、ようやくシリアは抑圧から解かれ、新たな時代を迎えた。これからのシリアにおいて、本や図書館という存在が、人びとの心にそっと寄り添い、新たな目標や課題解決に向けた動力源となっていくことを願ってやまない。あの移動図書館がそうであったように。